

ターン交代規則の破綻例の会話の含みによる説明の試み

川口 由起子, 土屋 俊

千葉大学大学院文学研究科, 千葉大学文学部

〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33 Tel.043-290-2277
yukiko@cogsci.l.chiba-u.ac.jp, tutiya@chiba-u.ac.jp

あらまし 音声対話の秩序は、「ルール」によって表現することが可能とされている。たとえば、「相手が話し終わったときには、自分に話し始める権利が生じる」というルールであるが、これらのルールが、音声対話に関する現象を一般化したものか、話し手/聞き手の推論過程をモデル化したものか、あるいは、この両者の相互作用も含めて記述したものかについては十分な検討がなされていない。この報告では、まず、現在発話者の交代に関するルールとして理解されているSacks, Schegloff, Jeffersonによる話者交代に関するルールの性質を検討する。このルールによると予測が困難だが、日本語地図課題対話において実際に頻繁に観察される「オーバーラップ」現象（相手話者発話中の発話開始現象）は、この話者交代の理論の破綻例だと考えられる。次に、これらの現象を説明するために、Griceの協調原則に基づく会話の含みの理論が、その一部について有効であることを示す。会話の含みの理論で定式化されている含まれたことが、相手話者の発話の途中までに言われたことから推論可能である場合に、相手話者発話中であっても発話を開始することがある、という説明である。しかし、聞き手側の推論のルールとして定式化されているこの会話の含みの理論も「ルール」として表現されているので、最初にその性質を解明した話者交代のルールとの間の概念上の比較検討を行い、これらのルールの統合に必要な理論構成について考察し、最後にこれらのルールを統合しても説明できない現象が存在することを指摘する。

キーワード 音声対話 ターン 会話的含み オーバーラップ 協調原則 日本語地図課題コーパス

On those aberrations from the turn-taking rules which can be accounted for by conversational implicature

Yukiko Kawaguchi, Syun Tutiya

Graduate School of Letters, Chiba University, Faculty of Letters, Chiba University

1-33 Yayoi-cho, Inage-ku, Chiba-city, Chiba 263-8522, Japan. Tel.043-290-2277
yukiko@cogsci.l.chiba-u.ac.jp, tutiya@chiba-u.ac.jp

abstract In this paper, we analyze the theoretical status of the turn-taking rules which were proposed by Sacks, Schegloff and Jefferson to explain the cases in which the participants of a conversation orderly take turns to start their utterances. In the Japanese Map Task Corpus, there are observed a fairly large number of aberrations from what is expected by the application of the turn-taking rules, namely the cases in which one speaker starts talking while the other is still speaking. We propose that the theory of conversational implicature, derived from Grice's theory of co-operative principle, can account for a substantial portion of such aberrations, by stipulating that the interlocutor grasps what is implicated by what is said before the utterance is completed. There are other cases which can not be explained by this stipulation but it can be pointed out that to account for them, it is necessary to look more closely into the nature of the rules employed in those cases.

key word spoken dialogue turn conversational implicature overlap co-operative principle
Japanese map task corpus

ターン交代規則の破綻例の会話の含みによる説明の試み On those aberrations from the turn-taking rules which can be accounted for by conversational implicature

川口 由起子, 土屋 俊
Yukiko Kawaguchi, Syun Tutiya

千葉大学大学院文学研究科, 千葉大学文学部
Graduate School of Letters, Chiba University, Faculty of Letters, Chiba University
yukiko@cogsci.l.chiba-u.ac.jp, tutiya@chiba-u.ac.jp

はじめに

音声対話の秩序は、「ルール」によって表現することが可能であるとされている。たとえば、「相手が話し終わったときには、自分に話し始める権利が生じる」というようなルールである。しかし、これらのルールが、音声対話に関する現象を一般化したものであるのか、それとも、話し手および聞き手の推論過程をモデル化したものであるか、あるいは、この両者の相互作用も含めて記述したものであるかという点については十分な検討がなされているとはいえない。

この報告においては、最初に、現在、発話者の交代に関するルールとして理解されているSacks, Schegloff, Jeffersonによる話者交代(turn-taking)に関するルールの性質を検討する。このルールによると予測することが困難であるが、実際には日本語地図課題対話において頻繁に観察される「オーバーラップ」現象(相手話者発話中の発話開始という現象)は、この話者交代の理論の破綻例であると考えることができる。次に、これらの現象を説明するために、Griceの協調原則に基づく会話の含み(conversational implicature)の理論が、その一部について有効であることを示す。その基本的な説明方式は、会話の含みの理論で定式化されている含まれたこと(what is implicated)が、相手話者の発話の途中までに言われたこと(what is said)から推論可能である場合に、相手話者発話中であっても発話を開始することがある、ということである。

しかし、聞き手側の推論のルールとして定式化されているこの会話の含みの理論もまた、「ルール」として表現されるものである。で、最初にその性質を解明した話者交代のルールとのあいだの概念上の比較検討を行い、これらのルールを統合する際に必要となる理論構成について考察し、これらのルールを統合しても説明することができない現象が存在することを指摘する。

1. 会話の規則

本節では、Sacksらの会話における順番交代の規則を検討し、その規則が話し手、聞き手によってどのように使用されているかという観点から、その問題点を明らかにする。

1.1 Sacks, Schegloff & Jeffersonのturn-taking理論のルール

対話は一般的に話者交代によって特徴付けられるとして、Sacksらはその順番取りのルールとして以下のような理論を提示した。TRPは対話の順番移行が適切となる場である。

rule1: 最初のTRPにおいて、
(a) もし現在の話し手が次の話し手を指定するならば、その選ばれた相手は次に話す権利と義務を持ち、話者交代はそこで起こる。

(b) もし現在の話し手が次の話し手を指定しないならば、最初に話し出した人が発話権を得、話者交代はそこで起きる。

(c) もし現在の話し手が次の話し手を指定せず、ほかの参加者も話さないならば、現在の話し手は話しつづけることができる。

rule2: もし最初のTRPにおいてrule1(a), 1(b)が作動しなければ、1(c)によって現在の話し手が話しつづけている。そのときは話者交代が生じるまで、rule1(a)–(c)にルールは繰り返し次のTRPまで再適用される。 *1

このルールは、会話における順番交代がある程度は説明するものであるが、このルールから逸脱する発話者の順番交代の事例も存在している。にもかかわらず、以上の規則がルールであるのは次の意味においてである。すなわち、その理論は、turn-taking等のルールを一般化して抜き出すことにより、その背後にある社会的な秩序を理解することを目的とするからである。会話分析がそこから登場したエスノメソドロジーでの考察は、以下のように進む。

「例えばあいさつ/あいさつの隣接対を取り上げるなら、私たちはあいさつが必ずしもあいさつを引き出さないことが実際にあることを知っている。しかしここで言われていることは、それが経験的規則であるということではない。むしろ重要なことは、あいさつが返礼として返ってくるという期待は、それがルーティンな実践的-道徳的秩序(practico-moral order)に属することがらとして期待されているということである。」 *2

隣接対とは、隣接して位置づけられる、別々の発話者から作りだされる二つの発話であり、例えば、「問い」と「答え」は隣接対

を構成している。

会話分析では、実際の会話記録の観察に基づいて会話を記述しようとするが、実証主義の規則のような経験的規則ではなく、参加者それぞれがコミットすべき規範的、道徳的な規則であり、参加者はその規則に従うよう期待されている。たしかに、このようなルールが想定されることは理解できる。しかし、このルールが何をあらわし、説明しているかは、明確にされていない。

1.2 turn-takingのルールの問題点

問題は、その一般化されたルールにあてはまらないものが生じたときである。そのようなものが生じるのであれば、turn-takingのルールだけでは会話のルールにはならない。実際、ルールにあてはまらない会話はたくさんある。よって、自然な会話をするには、この一般的に従われると期待されるルールを破るときのためのルールが必要になる。

実際の会話をみれば、turn-takingのルールだけでは会話のルールにはならないことは明らかだ。実際の会話で、ルールにあてはまらない会話はたくさん観察される。ルールにあてはまる会話は会話として充分成立するが、このルールどおりにはかたがた会話しないことは実際にはなく、不自然である。そうであれば、自然な会話をするには、ルールを破るためのルールが必要になる。ルールが守られる期待を保ちつつ、どのような場合にそれが破られるかを記述したルールがなければ、会話のシステムとして成り立っていない。turn-takingのルールの理論を有効にするには、ルールに当てはまらない行動のルールの理論も付け加えればよい。

(なお、1.1でみたように、turn-takingのルールのように一般化したルールからその背景にある社会学的秩序を想定し考察をすすめてゆくとときに、その一般化されたルールにあてはまらないものがルールの背後の秩序に含まれることは適切でないとされる。よって、ルールにあてはまらないものを単純にそのルールから導き出された秩序で説明するわけにはゆかない。また、すべてを説明できる1つの一般的なルール概念(たとえば、完璧なturn-takingのルール)を想定することは不可能と思われる。しかし、会話分析の手法でそうして説明すべきかどうかはここでは論じない。)

たとえば、話し手が重複する場合はturn-takingのルールでは説明されていない。どのような場合にturn-takingのルールに従わなくてもよいかというルールを付け加えることになるのだから、この場合でいえばどのような条件で話し手が重複してよい(必ずそうなる、ではない)かを記述するルールを想定すればよい。つまり、

1. turn-takingのルール

2. turn-takingのルールに従わなくてもよい

ルール

(2.1 これこれの場合、turn-takingのルールに従わず発話は重複する...等々、具体的なルールが2の下位ルールとなる)という概念構造になる。

2. 会話の含み

このような、一般的なルールとそれに従わないときのルールの両方を想定したものとして、Griceの会話の含みの理論がある。turn-takingのルールにあてはまらない場合は、この会話の含みで説明できる部分がある。つまり、一般的に従われることが期待されているturn-takingのルールを破ることによって、ルールに従っていないことを示すことによって何か別の意味、<会話の含み>を伝えているといえる。オーバーラップ(重複発話現象)について論じた榎本.1999では、オーバーラップを3つに分類するが、そのうちの1)、2)a、および3)bにturn-takingのルールに従わない共通の理由、すなわち会話の含みを読み取ることができる。

オーバーラップが生じたとき、オーバーラップした人は、自分の発話開始までの相手の発話を聞いて、そのあとに続く発話を推論している。そのとき、オーバーラップされる側のオーバーラップ開始までの発話に、その後続く発話が会話の含みとして含まれていると推論された。また、オーバーラップする側は、オーバーラップされる側に「相手が何を言おうとしたかを推論し理解した」ことを示している。これらを示すのがturn-takingのルールに従わない理由となっており、そこに含まれた意味である。下は、一般的に期待されるルールに従わないことで何か別のことをその発話によって示すと説明できる例である。以下に日本語地図課題対話における実例を引用する(番号は榎本.1999の分類番号と対応している)。

1) A:ーきにそってっぺんまでいってくだ*さい

B: *はい

2)a A:ーのすぐしたにおー*ときゃんぶじよう

B: *ときゃんぶじよう

3)b A:ーをとおつ*てー

B: *て<でそれによようするにはんとけいまわりにいくと

*はオーバーラップの開始地点を、<>は400ms以下のポーズを示す。 *3

まず、Aの発話については、例をみればわかるように、Bは言葉を発したときにはAが言ったことを理解していると思われる。BはAの発話全体をまだ聞いてはおらず、オーバーラップしている。よって、Bはオーバーラップする前までの完結していない発話から発話全体(発話の残り)を推論して理解していることになる。言い換えれば、オーバーラップされたAの発話はオーバーラップされる前のAのまだ完結していない発話に含意されて(implicated)いると、Bの推論は進む。

非形式的ではあるが概略的に会話の含みを説明するところなる。Bが推論するAの発話については、1)の場合、Bは

1. Aの「一きにそっててっぺんまでいって」までを聞く。

2. 1から「一きにそっててっぺんまでいってください」を推論。

3. 2の推論に基づいてAの依頼を受諾する返事「はい」を、推論できた時点で発する。最終的にAは「さい」まで発話するのだが、Bは発話する前には「一きにそっててっぺんまでいって」しか聞いていないのだから、Bにとって「一きにそっててっぺんまでいって」がwhat is saidで、「一きにそっててっぺんまでいってください」がwhat is implicatedである。同様に、2)aでは、Bは

1. Aの「一のすぐしたのおー」までを聞く。

2. 1から「一のすぐしたにおーときゃんぶじょう」を推論。

3. 2の推論に基づいてAの語尾を引き継ぐ発話「ときゃんぶじょう」を、推論できた時点で発する。

「一のすぐしたのおー」がBにとってのwhat is said、「一すぐしたにおーときゃんぶじょう」がwhat is implicatedで、「一のすぐしたにおー」から「一のすぐしたにおーときゃんぶじょう」が推論された。3)bも同じように、「一をとおつ」に「一をとおつてー」が会話の含みとして含まれており、「一をとおつ」から「一をとおつてー」が推論された。

ただし、いま述べたBが推論するAの発話に関しては、2.1で述べるGrice理論を拡張したものであることを指摘しておく。つまり、Grice理論において聞き手の推論は、何らかの逸脱が生じたことが認知されたときに開始される。これは、文に意味が帰属し、その文の文字通りの意味が解釈され、その意味のかぎりではその発話が協調原則にあっていないとされたときに推論をし含みを得るということになるとされている。本論文においてとくにオーバーラップを説明するために導入した推論に関する理論は、発話の意味解釈が終わった段階ではなく、発話の途中でも何らかの推論が行われることを必要とする。この点で、本論文の理論はGrice理論を拡張したものである。 *4

次に、Aが推論するBの発話については以下のようになる。Bが会話の含みとしてオーバーラップする前の発話の部分からそれ以下の発話を聞かずに推論し理解しただけでは、Bが実際に発話しオーバーラップする必要はない。頭の中で理解しているだけでもよい。Bがオーバーラップして発話したということにも、会話の含みがある。たとえば1)では、「はい」とオーバーラップすることで、「一きにそっててっぺんまでいってください」を聞いてそこから「一きにそっていってください」を推論し理解したということとを、BはAに示している。そして、Aの発話全体の理解に基づいて（承認したり、語尾

を引き継いだり、その理解に対する反論を展開し始めたり等）Bは新たに発話する。

・ what is said: 「はい」受諾を示す。

・ what is implicated: 「はい」とオーバーラップすることによって、*より前の発話から*より後の発話を推論したことを示す。

この際Bは、発話することによって、その発話の字義通りの意味と、それとは別のこと（「私は*より前の発話から*の後の発話を推論し理解した」）とを示している。これはGrice理論で説明できている。2)a、3)bも同様に説明される。このようにあらわされたものが会話の含みである。このようにして、turn-takingのルールからの逸脱が会話の含みにより説明できる。turn-takingの破綻例であるオーバーラップを会話の含みで説明するには、次にGrice理論を検討する必要がある。

2.1 Griceの協調原則の理論

Griceは、会話者が遵守するものと期待される大まかな一般原理を定式化することができるとして、以下のようなものをあげている。

協調の原理：言葉のやりとりにおいて受け入れられている目的あるいは方向性を踏まえた上で、当を得た発言を行うようにすべきである。

また、この協調の原理にかなう結果を生じさせるためには、より特定の格率や下位格率に従わなければならない、それは量・質・関係・様態の4つのカテゴリーに分類される。

量 1 （言葉のやり取りの当面の目的のための）要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい。

2 要求されている以上の情報を与えるような発言を行ってはならない。

質 1 偽だと思ふことを言ってはならない。

2 十分な証拠のないことを言ってはならない。

関係 関連性のあることを言いなさい。

様態 1 曖昧な言い方をしてはならない。

2 多義的な言い方をしてはならない。

3 簡潔な言い方をしなさい（余計な言葉を使ってはならない）。

4 整然としたいい方をしなさい。 *5

なお、協調原則とは、協調の原理と諸格率をあわせたものの通称である。

このルールも、turn-takingのルール同様、前もってこれに従うよう意識されて会話されるようなルールではない。Grice自身述べるように、これは実際に従うものとしてではなく、それに従うことが理にかなっており、放棄されるべきでないものとして考えられている。*6 これは、turn-takingのルールとの比較でいえば、turn-takingがあらわれてくるような背後の秩序に相当している。しかしGriceの理論では、それにあてはまらないものも説明する。協調原則にあてはまらない会話は、たまたまそうなってしまうのではなく、そのようにしている別の意

述格、とい含を。づにできことの合う徴下方ととうる話場言特以仕な言い会るとにをなうを、れ、うルよ柄しはさるよ一の事守に出いのルろその遵めみて下るい。りをた生え以す、う通則るでさ、理解はろた原せ方は、理者だつ調さ仕利みを加る言協和なが含ひも参するが調う率の含。脱現者をよ格話。品のく逸が話との、会る。話おら者発定こててれば率発とうみ指よけ

えさ待るだんなつ来そしこつ一添よ(従い)言を期れがうなにした対。カルにもない)を
つうわ相よにしまるわ。待てルは念さよ
従相分何。刻えたら期く(ル)概いすに
い気「い遅いだかのな(ル)のあ返ル
してい、なのときだそわるアと一か
てなでれたるべ。も従ル「ル」立
くこしないするてにさう接うな。
をたそもあて返あつル加い隣よ
うる腹し。かはしとであ一追と
もおほいに返います私示」の
がルが、で「それすれいな返
」とうな期合、ルす話ばは、
さてさし言っはる場合、一に
会えにり、待しいもとよいお
うれいうに、とときお期
刻あか」にて、「そわな
いよ様たとてが遅、る?と
っ合て行くとい、同、ば
れさこい場てたのての
てルいいわ

Griceのルールでは、協調原則というルール、協調原則からの逸脱のルールの2種類あった。しかし協調原則からの逸脱のルー

のためのルールか、具含解釈理客会にでつ順す
 判断が1つは、え、のの解釈は、ののを先述
 のことは、い、会複、解でいるた位優記
 理解ないルとなるしま適。そき理解数優にし、
 話がルで要に話なはを複りめか
 発位が明あるわ、れ会くこ真肢つの明
 で、順のGriceの説があるまい、示す話選る。そを
 の優先も釈であいま、提のし、要る
 の優る。の解釈がしいをそ等能必ける
 あ積あたく、解択てい、が不がつけ
 数解でしたく、種なでと理み、断と定い
 複点脱で一種がたな含順判を決よ
 はは題逸は、可幅がたな含順判を決よ
 にに問ら体み釈に解観話優は、け位れ

みこ形とるのの一で協理
含いるみあす握ルル「なも。
のなれ含。返把の。一、らてる。
話いさのるき話まいルりまっあ
会待話あ聞発含のあはよて
、れ期会、なのいみがてにき
とさ。、らずう話て含要アルベ
ル定るちかきよ会れの必も一
一、想あうるで、さ語るにルれ
ルがで、のあ解こ則わ会すみのら
の話点話が理。原らも定含らえ
則発題発話かた調あて想のち加
原の問い発と面協も則を話とち
調外のなないこ場はに原ル会の
協以めこないのな一ら調一もい
、ルつてき何的りち協ルに、な
また一二つでが常ゴどてい則はき
はまが返断話日テのんな原ので
のとで判発はカルよも調も解

よなこ差理論な
る目的に理と
か般あるの要
て一分内ル必
みは十らル概
をに不かの概
理論はこれの
の理でこそル
ののけ。れ一
ルのた。その
ル一するもの
のルすなてつ
のの述にし2
（つ話記かと
）上二会をら
以に、ル明た
うル一があは
とがはる。

2 1の原則的なルールに(なにか従わない
理由が別にあるとき)従わなくてもよいと
いうルール(どのようにならなくて
記述される)具体的なルールは2の下に

3 1,2どちらにもあてはまらない発話は1,2どちらの仕方でも理解しない。

つまり、1の原則的なルールに従っておらず、かつ、2の形で従わない理由が他にない場合があるので、それを「1でも2でもない」と把握するためのルールである。Griceの理論で例を示せば、AとBの会話において、ルール1の場合

— 155 —

B:「あんまり美人じゃないですね、、、」
 となる。ルール2では、
 A:「彼女は美人？」
 B:「彼女はとても性格が良いよ」
 となる。関係のあることを述べるという1の原則的ルールに従わないことで、暗に「彼女は美人ではない」ということを意味しているのであり、そのことにはっきり言及したくないというのが原則的なルールに従わない理由となっている。ルール3というのは、

A:「彼女は美人？」

B:「(突然叫ぶ)」

この場合、Aは何が起ったのか分からない、瞬時に意味を汲み取れない発話だ、とBの発話をとらえるだろう。3に付け加えるならば、

3 1,2どちらにもあてはまらない発話は1,2どちらの仕方でも理解しない。そのようなものは理解不可能とするというルール

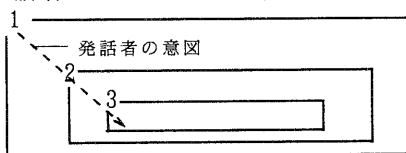
3のルールを記述することで、聞き返しや会話のやり直し等の行為へつながることが説明できる。3のAは、Bが叫んだあと「それどういうこと？何？」と聞き返すことは自然に予想される。これはBの叫びが1,2どちらのルールにも従っていないとカテゴライズされることを示している。(Aが原則的なルールに従わない行為をする(=叫ぶこと)で何を示したかったのかが、Bにわからなかった場合もあると思われるが、その場合は3の状況は2のルールでの推論の失敗である。ただし、3の状況がすべて2における推論の失敗かどうかはさらに考察が必要であるのでここでは論せず今後の課題とする。)

4. 結論と今後の課題

会話のルールの理論には3つの概念構造が必要である。

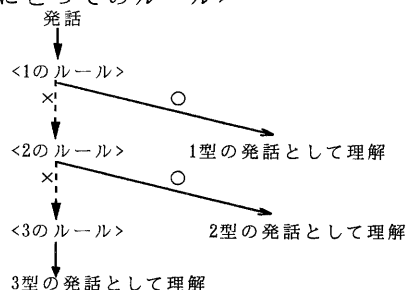
1. 従わることが期待される原則的なルール
2. 原則的なルールに従わなくてもよいというルール
 2の下位ルール. 1のルールに従わないときのルール
3. 1にも2にもあてはまらないものは理解できないものとカテゴライズするルール
 整理のために、2つの図式化を試みる。

<発話者にとってのルール>



発話者の意図が1~3に進むにしたがって、従うルールも1~3の形をとる。

<聴者にとってのルール>



○はそのルールにあてはまる(従っている)、
 ×はあてはまらない(従っていない)を示す。

2のルールに関して言えば、「従わなくてもよい」では十分ではないかもしれない。会話の含みの議論をふまえて、次には「従ってもよく、従わなくてもよい」の判断について考察を進めれば、より実際のルールの理論に近づくと期待している。

<注・参考文献>

- *1 H. Sacks, E. A. Schegloff, and Jefferson. A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. *Language*, Vol. 50, No. 4, pp. 696-735, 1974. なお、邦訳は榎本美香「重複発話現象に基づくターンテイク理論の見直し〜日本語地図課題対話を通して〜」情報処理学会情処研報vol. 99 No. 64 (音声言語情報処理99-SLP-27-3) pp. 18-19, 1999. を参考にした。
- *2 Lena Jayysusi, Values and Moral Judgement: Communicative Praxis as Moral Order. Graham Button (ed.), *Ethnomethodology and the Human Sciences*, Cambridge University Press, 1991. なお、邦訳は山田富秋「会話分析の方法」(『岩波講座現代社会学第3巻 他者・関係・コミュニケーション』岩波書店, 1997.) pp. 132から引用。
- *3 榎本美香「重複発話現象に基づくターンテイク理論の見直し〜日本語地図課題対話を通して〜」情報処理学会情処研報vol. 99 No. 64 (音声言語情報処理99-SLP-27-3) p. 20-22, 1999.
- *4 しかし、この拡張はいずれにせよ必要な拡張である。Hanae Koiso, Yasuo Horiuchi, Syun tutiya, Akira Ichikawa and Yasuharu Den "An analysis of turn-taking and backchannels based on prosodic and syntactic features in Japanese map task dialogues" *Speech and Language*, Vol. 41 No. 3-4, pp. 295-321, 1999. によれば、次話者が決まる過程で聞き手の発話開始のタイミングを決める第一の要素は、品詞などの知的意味的理解に必要な情報であるとされている(注: プロソディなどのように知的意味認知よりも基本的なものが第一義的に決定するのではないということはこの重要な知見である)。この事実、聞き手が、話し手が発話している間に何らの理解を行っていることを示唆していると考えられる。したがって、その理解に基づく推論が行われていないということができない。そして、そのような推論の存在を仮定すれば、いくつかのオーバーラップの説明が可能になることは示した通りである。
- *5 H. P. Grice, *Logic and conversation*, pp. 45-46, in Cole, P. and Morgan, J. (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, New York, Academic Press, 1975.
- 邦訳『論理と会話』清塚邦彦訳、勁草書房 1998. pp. 37-39
- *6 前掲書、邦訳 pp. 41
- *7 前掲書、邦訳 pp. 43-45